

異文化コミュニケーションにおける 会話スタイル相違に関して

— 日・中の学生初対面会話スタイル比較考察 — （その2）

ト 雁*

1. はじめに

人々が会話の相手として向き合うのは、自分が相手との社会的距離や関係持続可能とその希望の有り無し等必要要素以外に、大きく分ければあくまでも、よく知っている人、あまり知らない人と全く知らない人の3種類のどちらかになろう。そして会話の際には、意識的に或いは無意識的に相手に意思や気持が伝達されるように会話の内容や方法を選択し、コミュニケーションする。

ところでこれらには、会話受信相手によって、また発信者自文化（自国文化と個人特質のような文化）¹の影響によって、会話の方式や配慮の仕方、また、相手への伝わり方などに違いが存在する。これは言わば、伝えようとする意思や伝える方法の「度」の調節が大事であり、それぞれ潜在的に或いは意図的に言語行動を左右しているものがあるのではないかと思われる。

共通認識として、相手に好感を持たせ、交流持続を期するのであれば、最適な言語表現（つまり、ことばによる言語表現とことばによらない非言語表現）が選択されるに違いない。しかしこの最適とされる表現は、文化を異にする受信者側にとって必ずしも心地好い会話のスタイルとして受け取れるとは限らない。本研究はこれを前提にして日本人大学生と中国人大学生の初対面会話スタイル相違について考察を行う。

本研究は前回の「その1」²に続き、学生海外語学研修期間中とその後実施された「初対面会話スタイルの違いに関するアンケート」調査とフォローアップ面接調査の結果に基づき、日本語話者と中国語話者間に存在する会話スタイルと対人コミュニケーション様式の相違を探り、異文化コミュニケーション様式に関する語学教育の課題を考えることとする。

前回は質問紙調査と面接調査での結果に差が生じたものや調査の範囲や対象の違い等によって、先行研究の考察と異なる結果になったものがあり、また同じ日本人でも海外語学研

*総合福祉学部 准教授

(1)

修参加者と非参加者の間でコミュニケーション行動の積極性に関する相違が見られ、更に検討する価値あるものがあった。

本論では、海外研修で実施された1回目の調査とその後日本で実施された2回目の調査に見られた結果相違、また、面接調査結果に関して考察をしながら、次のことに焦点を当てて検討したい。

- 1) 日・中学生が会話ををする際にそれぞれ意図的に自分自身の言動をコントロールしている意識重点が違う。
- 2) 「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」(重光, 2005) というアメリカ的観念意識が中国人にも当てはまる。
- 3) 異なる文化間において対人親密度表現相違があり、それは各々文化価値観による言語行動基準相違によって生じる。

2. アンケート調査結果から見る考察

昨年海外語学研修実施の際に、筆者とゼミ指導学生が研修参加日本人学生と現地中国天津大学の学生に対して初対面会話スタイル比較研究のためのアンケート調査を行った。また、多くのデータも必要として、後学期に日本でまた2回目の同様アンケート調査を実施した。そこで、この2回の調査には相違が出てきて、興味深いものが感じられた。前論「その1」では主に日・中の学生間会話スタイル相違分析に重点を置いたが、本論では、日本人同士の相違点等の比較分析も視野に入れて考察を進めることにする。

2-1. 調査方法

昨年に行った本テーマの2回アンケート調査に関しては、第1回目は天津大学で実施し、日本人学生対象者は語学研修に参加していた淑徳大学生と愛媛大学生計20人であり、中国人対象者学生も20人、天津大学の学生であった。合わせて40人の回答データを集めた。しかし、後で送られてきた回答もあり、日本人は5人、中国人は3人増えたので、本文でのこれからの考察分析はこの増加分データも含めて行うことにする。

第2回目のアンケート調査に関しては、日本人学生は淑徳大学の異文化理解講義の履修学生たちと中国語Ⅲ(中国語中級前期クラス相当)を履修していた計50人の学生に行い、中国人学生は、淑徳日本語学校に留学中の学生37人に対して行った。2回目は合計87人の回答を集めた。アンケート調査の回答者数は表1の通りになる。

また、更なる研究データを得るために、淑徳大学千葉キャンパス日本人学生男女24人と中国人学生男女10人に直接質問して回答してもらうフォローアップ面接調査を行ったが、内訳は、日本人は語学研修参加経験者学生11人と語学研修未参加者学生13人、中国人学生は、天

表1 2回アンケート調査対象人数内訳

	1回目	2回目	2回合計
日本人	語学研修参加経験者25人	淑徳大学生50人	75人
中国人	天津大学生23人	淑徳日本語学校留学生37人	60人
合計	48人	87人	135人

津大学と蘇州淑徳語言学校と淑徳日本語学校在学生7人と淑徳大学在学留学生3人であり、それぞれ個別に面談や電子通信により実施した。その内訳は表2の通りである。

表2 面接調査の対象者人数内訳

日本人海外語学研修未経験学生	13人
日本人海外語学研修参加経験学生	11人
中国人学生	10人

対象者合計は中国人学生10人、日本人学生24人であった。面接調査に関して、第3節で述べることにする。

2-2. アンケート調査内容

紙面アンケート調査内容は、初対面の日本人と中国人の学生交流時等に見られる会話スタイルの違いやアプローチの仕方が原因で起こり得る心地悪さの程度、また、初対面会話スタイルについての相違度を測るものであり、関連設問内容は次の通りであった。

- ①「初対面の相手であっても、好印象を持たれるために自分の良いところをアピールするか」
- ②「自分の意思や欲求、感情は、ことばに出して相手に伝えるか」
- ③「初対面の人と話す時進んで話題を探し、間を保つ努力をするか」
- ④「自分から対話を終わらせることはよくするか」
- ⑤「パーティーや交流会で自ら話しの相手を探しアプローチするか」

以上の設問に対し、それぞれ5段階-「全く望ましくない」「あまり望ましくない」「どちらともいえない」「やや望ましい」「非常に望ましい」の選択を設け、1問につき○1つ付けてもらう方法を取った。

尚、上述2回実施した関連アンケート調査は同内容であった。

2-3. 前後2回アンケート調査の違う結果に関して

昨年の調査考察では、日・中インフォーマント間の全体的比較に重点を置き、全体数を出

す方法を取ったが、分析していく過程において、日本人回答者の1回目調査と2回目調査のデータに差があることで、期待結果のズレが生じたことが分かり、前後2回の調査回答者に違いが生じる何らかの原因があると考えた。データを改めて分類し分析すると、例えば調査項目①では、語学研修に参加した学生と参加していない学生では、対人初対面会話に関する考え方に違いがあると分かった。

2-3-1. 初対面会話でのアプローチに関して

2回のアンケート調査結果の全体まとめを再度提示すると、表3と図1、図2の通りである。

表3 「初対面の相手でも好印象を与えるためにPRするか」の日本人学生と中国人学生回答割合

	日本人割合	中国人割合
非常に望ましい	4%	27%
やや望ましい	28%	25%
どちらでもない	33%	23%
あまり望ましくない	28%	22%
望ましくない	7%	3%
合計	100%	100%

「好印象を与えるためPRする」割合－中国人合計

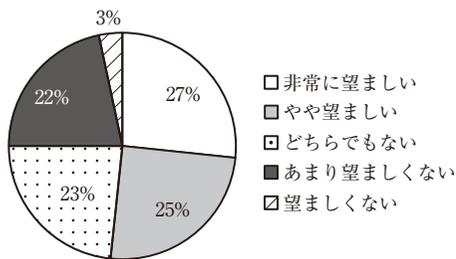


図1 「好印象を与えるためPRする」
－中国人合計割合

「好印象を与えるためPRする」割合－日本人合計

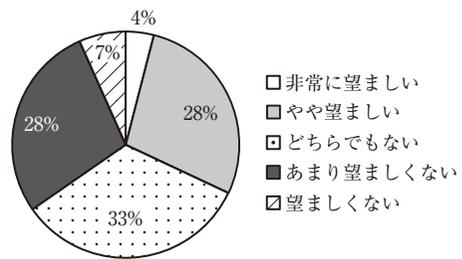
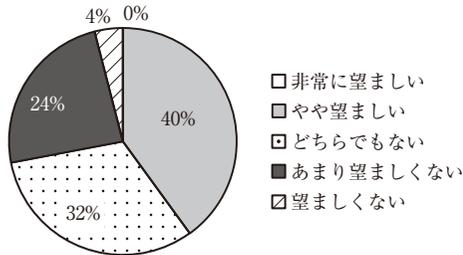
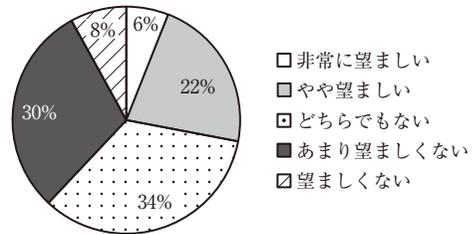


図2 「好印象を与えるためPRする」
－日本人合計割合

以上図表で分かるように、日本人の「非常に望ましい」4%と「やや望ましい」28%の合計32%に比べ、中国人の27%と25%の合計は52%で、支持の選択が多く、ほぼ予想した結果であるが、日本人の1回目と2回目の回答データ詳細を対照して分析すると、次のような結果が出ている。

「好印象を与えるためPRする」割合－
日本人1回目（語学研修参加者）図3 「好印象を与えるためPRする」
－日本人1回目調査回答「好印象を与えるためPRする」割合－
日本人2回目（語学研修非参加者）図4 「好印象を与えるためPRする」
－日本人2回目調査回答

更に、図5通り比較データを並べて示すと、1回目語学研修中の学生のアンケート調査回答結果は「非常に望ましい」の選択がないものの、「望ましい」は40%あり、2回目日本で行った調査の「非常に望ましい」6%と「やや望ましい」22%の肯定的回答合計28%より「望ましい」欄の選択者は12%多くになっているのが分かる。

「好印象を与えるためPRする」割合－日本人比較

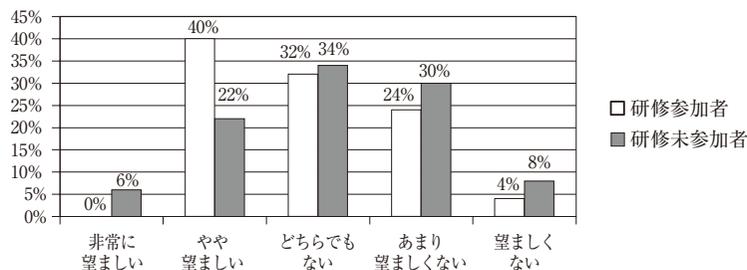


図5 「好印象を与えるためPRする」－日本人1回目と2回目比較

この再分析から、語学研修参加経験者と未経験者では、初対面会話でのアプローチ姿勢に違いがあるのがうかがえる。また、関係データの他項目を詳細分析すると、このようなはっきりした傾向が見られる。

2-3-2. 相手に意思等を伝えることに関して

設問「自分の意思や欲求、感情は、ことばに出して相手に伝えるか」に対して、1回目と2回目調査、つまり、海外語学研修参加中の学生と参加未経験学生のそれぞれトータル回答データを図6と図7で示し、また、その比較グラフを図8に表示する。

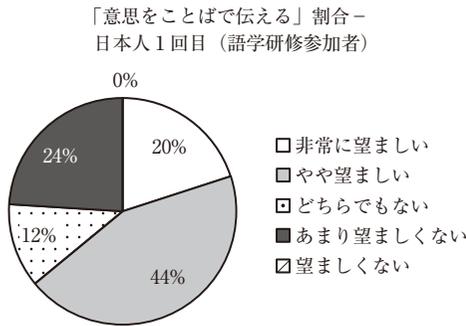


図6 「意思をことばで伝える」
－日本人1回目調査回答

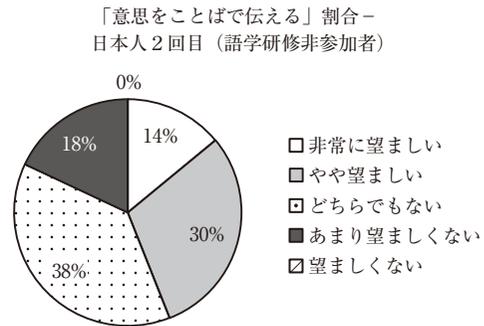


図7 「意思をことばで伝える」
－日本人2回目調査回答

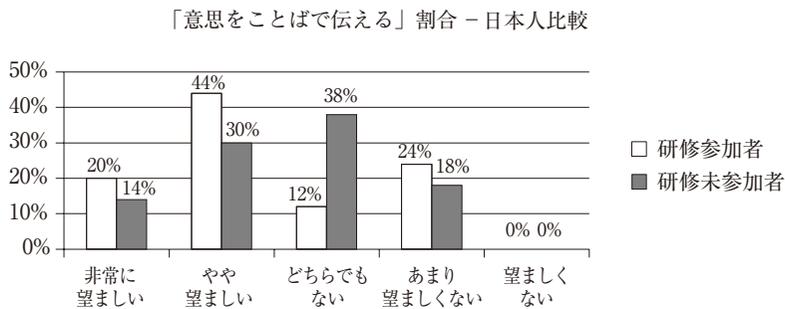


図8 「意思をことばで伝える」－日本人1回目と2回目比較

上記比較データでは、語学研修参加学生の肯定的回答の合計64%に対し、参加未経験学生は44%で、違いが小さくないといえる。後での面接調査でも、会話でのアプローチ行動が「状況による」のような回答が特に後者のインフォーマントに多く、進んで自分の意思を伝達するような交流姿勢に違いがあるのではないと思われる。

2-3-3. 初対面の人と会話が途切れないように間を保つ努力に関して

「初対面の人と話す時進んで話題を探し、間を保つ努力をするか」の設問に対し、面接調査回答データと差があるが、まず、アンケート調査の結果から見ることにする。

4グループ回答は図で示されたように、肯定的選択はいずれも半数以上になり、少ない。比較すると、中国人1回目の「望ましい」選択合計は70%で一番多いが、「望ましくない」という否定的選択も合計26%で一番多い。しかし同時に、他の3グループでは「どちらでもない」選択者数がほぼ同じ30%で共通しているのと大きく離れ、4%であるのが興味深い。

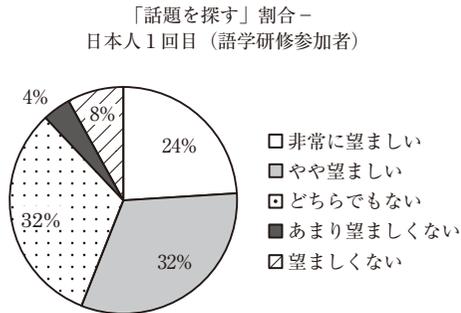


図9 「話題を探す」－日本人1回目
調査回答

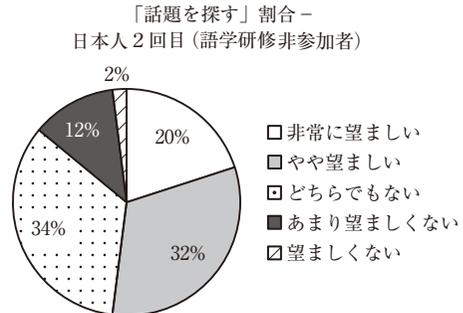


図10 「話題を探す」－日本人2回目
調査回答

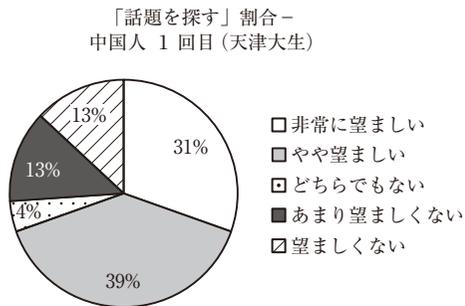


図11 「話題を探す」－中国人1回目
調査回答

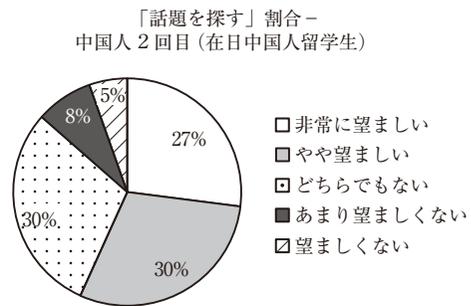


図12 「話題を探す」－中国人2回目
調査回答

後述の面接調査問5「会話が途中で途切れそうになった時あなたはどのようにしますか」の質問に対する回答では、多くの日本人学生には「状況を見る」や「相手次第」のような「ケースバイケース」の回答があり、この「どちらでもない」に相当するであろう。しかし、中国人1回目調査での4%に対し、2回目調査、つまり在日留学生の回答は30%と多く、他の日本人グループと差がほとんどなくなっている。これは、日本で生活している中国人はより「状況による」というような日本の「控えめ」傾向になっているのであろうか。

しかし、面接調査の中国人学生は、交流会等の初対面の場合では「会話持続のための努力」をするような回答が多く、否定的回答はほとんどなかった。この設問に関し、日本人と交流が多い中国人学生には聞き方自体は答えにくいのか、又は紙面では把握しにくい考慮要素があったことであろう。

筆者の期待では、日本人は特にあまり知らない人と会話する際に、積極的に会話を継続

させることより、適宜の「沈黙」も良いこととされ、外国人特にアメリカ人や中国人のような、会話に間を開けるのに不具合を感じ、「親しさ」の表現や態度を良いとする話者にとっては「心地悪さ」が生じることであった。

しかし設問の「間を保つ」ということばは、被験者にインパクトがあり、日本人のインフォーマントに実は肯定されていることであろう。「場を保つ」「間を大事にする」ことは日本人にとって重要な対人配慮要素の一つで、相手との「間」はむしろ大事にされるものだから、肯定的選択が多くなり、質問者の期待値とズレがあったのであろう。以上の原因を考えると、更に重光氏のアメリカ人が日本人と違った「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」という観念は中国人にもマッチするように思える。

重光(2005)は初対面の日本人とアメリカ人が英語で行った会話から、日本語と英語の会話スタイルの違いが会話の心地好さ、心地悪さにどのように影響しているかを分析した。アメリカ人は「理解を踏まえて会話する」「話し手は意見をはっきり言う」「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」という文化・社会的背景を土台にしていると示唆しながら、圧倒されるようなことばの量と息もつかないアメリカ人同士の会話には日本人が無視されているような心地悪さがあると分析した。また、日本人の文化・社会的背景には「人間関係や意見の対立回避を優先する」「相手の話を察しながら聞く」ため、互いに心地悪さがあるという分析がなされた。(重光, p 235)

一方、久米ら(2000)が日本人グループとアメリカ人グループの会話観察をして、次のような考察を示された。日本人は議論において課題達成よりも「場」や人間関係或いは会話を楽しむことを重視する傾向があり、「相手が自分のことをどう思っているかということをつつも気にしつつ、相手の反応によっては安心して自分の意見を断定的に述べる」傾向があり、前の人の意見を補足しながら共同で会話を展開させている傾向があるという。

また、「議論の流れに乗ることを重視し、その場その場で、相手の発話に補足したり、明確化したり、付加する発話」、更には、「言いよどみや言いさしも、極めて頻繁になされ、参加者が共同で作り上げ、流れに乗っていくという傾向」が見られると示唆された。「割り込みの頻度に関しては、中国とアメリカが多く、沈黙は日本が一番長い」。また、「一人一人がある程度の時間を占有して議論を進めていくという点では中国人とアメリカ人の間である程度の共通性が見られ」、日本人のコミュニケーション様式が、中・米と大きくかけ離れていることが明らかに観察されたという。

本論は紙面調査と一部実施の面接調査ではあったが、日本人と中国人話者間において、このような会話スタイル相違があることが顕著に表れている。日本語に「空気を読む」ことばはあるが、中国語に特にない。「空気を読む」のが大事にされることはコミュニケーションの「場」的配慮に由来し、話の内容や主観的表現より相手との「適切」な関係判断を優先さ

せるのであろう。

紙面調査の「対話を終わらせる」項目の回答でも、同じように特に有意性がはっきりしないものがあったが、紙面による調査の限定性がありながら、久米らの観察方法で得られた示唆に同義するものがあるといえよう。

2-3-4. 自分から会話を終わらせることに関して

設問「自分から対話を終わらせることはよくするか」に対し、2回調査の日本人グループと中国人グループには大差はなく、上で述べたような理由で回答しにくい面があるのか、「どちらでもない」選択が多かったが、日・中の学生グループ共に1回目調査、つまり天津大学で行われた調査での肯定的選択が多く、2回目では少なかった。そして、「どちらでもない」回答をさて置いて考えれば、大体、以下のようなパターンに当てはまることになる。

日本人-1回目：肯定選択	多	否定選択	少	2回目：肯定選択	少	否定選択	多
中国人-1回目：肯定選択	多	否定選択	少	2回目：肯定選択	少	否定選択	多

割合データは以下の通り、図13~16で示す。

後述する面接調査問3の「面白くない会話になってきたらどうしますか」の中国人学生の回答では、絶えず違う話題を探し、或いは他人を巻き込んで会話に参加させるといった行動をとるといえるがあるが、逆に日本人学生は、「他」を意識して「控え目」に意思表示をすることと相手との距離的關係を意識して会話参与をすると考察できる点では、前述の久米らの観察結果に一致すると考えられる。

ゼミ指導学生が語学研修に参加して日・中間会話スタイルの相違を強く感じ、時々学生交

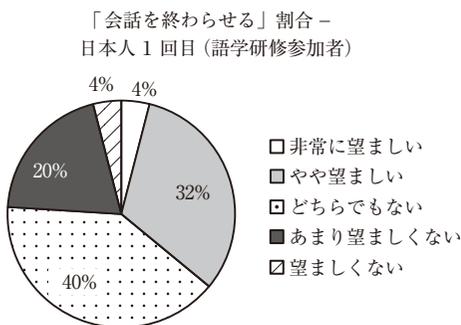


図13 「自分から対話を終わらせる」
-日本人1回目

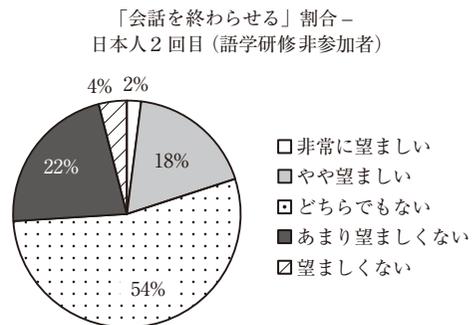


図14 「自分から対話を終わらせる」
-日本人2回目

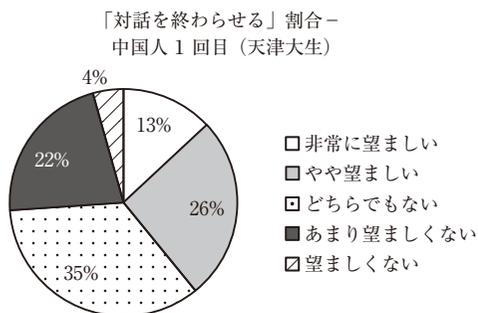


図15 「自分から対話を終わらせる」
－中国人 1 回目

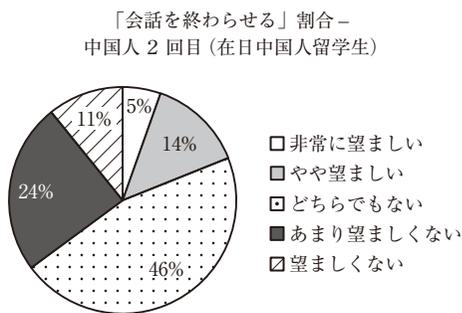


図16 「自分から対話を終わらせる」
－中国人 2 回目

流会話の場から逃げ出したくなる気持ちも生じると言った。このような感想を示したのは全員ではないが、中国人の積極的な会話アプローチに圧倒され、会話を終わらせたいという非言語表現がしばしば観察され得る。結局、このような学生は国際交流を通じて対人コミュニケーション行動に関して認識と能力が高まり、後の学生たちのリーダー的存在にもなる。

例えば次のデータ比較でその一端を垣間見ることができよう。

2-3-5. 相手に積極的に会話アプローチすることに関して

設問「パーティーや交流会で自ら話しの相手を探しアプローチするか」に対して、日本人学生の1回目と2回目インフォーマントの回答が対比的になるが、図17と18の通りである。

図17の天津大学で実施したアンケート調査データでは、日本人インフォーマント半数以上の56%は支持の回答で、不支持は12%であるに対し、2回目日本で実施した場合の日本人インフォーマントの支持は26%、不支持は42%になり、両方の差が大きい。

一致するのは「どちらでもない」選択が両方とも30%で多いことだが、面接調査では「相

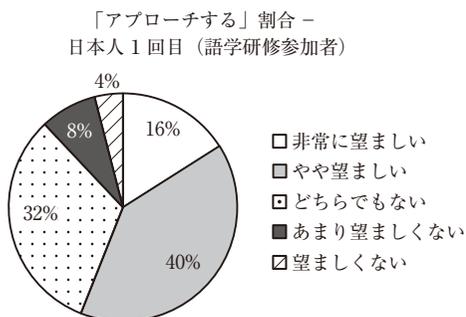


図17 「会話アプローチをする」
－日本人 1 回目調査回答

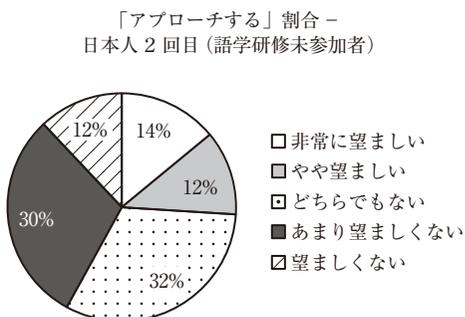


図18 「会話アプローチをする」
－日本人 2 回目調査回答

手が独りの場合は声を掛ける」とか、「相手の雰囲気による」や「話さなければならない時は話す」など、「条件付き」アプローチがなされることから、この選択も「条件付き」のケースバイケースという考えであると判断できよう。これは、後述する中国人学生被験者の回答とは、大きく違ったものがある。

この相違は、日・中文化間の対人親密度の価値観における相違だと考え、これはそれぞれの話者が育った社会の文化価値観と社会行動基準が違うからだと考えられる。

『ことばと文化』（鈴木孝夫、1977）で述べられた指摘を学習すると、次のことが分かる。「典型的な単一民族社会に育った」日本人は、「未知の他人と気安くことばをかわすことを好まない」言語行動様式をとり、言語表現も「自分と相手との間の権力の差、親疎の度合などを反映した使い分け」をした「対象依存的」性格を持ち、特に自分と親しい関係にある相手でない場合は、「相手の出方、他人の意見を基にして、それと自分の考えをどう調和させるか」のような会話方式がむしろ得意である。これに対し、印欧言語では、例えば“ego” “I” の自称詞に現れるような「話し手の言語的自己規定」が「相手及び周囲の状況とは無関係に」独立的になされ、「話し手の役と聞き手の役しか通例明示しないで対話を進めていく」ことができる（鈴木、pp187-203）。

このように、各文化の価値観による言語行動基準相違によって、異なる文化間での対人親密度表現相違が生じる。日本と中国ではこういった異なる対人親密度表現に相違があるため、日本人は「他人」を意識し、迷惑をかけないような心掛けを言語習慣に持ち、一方、中国人は相手との「親近」を示す友好的姿勢を重視するという「文化的対人親密度の価値観相違」が存在すると思われる。

前述調査結果でも見られた語学研修で外国に行ったことのある、或いは外国人とよく交流する学生には、対人会話アプローチに対し積極的な回答が多く、逆に日本で生活している中国人は否定的な回答が多くなる傾向があるのは、実践的語学教育とコミュニケーション教育の力も説明される。

語学教育の中心問題は、言語文法以外の語学文化とコミュニケーション、また、語用論的知識養成が重要だとネウストブニー（1982）が主張する。J・V・ネウストブニーは、言語と文化の関係について、それまでの「言語」と「文化」という枠組みでの捉え方に対して、具体的なコミュニケーション行動の立場から、「社会文化行動」という観点を導入し、「実質行動」と「コミュニケーション」という構図のもと「コミュニケーション」のなかに「文法外のコミュニケーション」と「言語（文法）行動」があり、「実質行動」として2つの様相を持つところに、「コミュニケーション」の総体があるというモデルを提示した（pp40-60）。また、同氏は、日本語教育は単なる文法教育ではなく、インターアクション教育をめざすべきであると主張し、その中で最終的な目標となるのは、「社会・文化・経済的なインターア

クションのための能力」(ネウストプニー 1995, pp10-11)であり, その「インターアクションのための能力」の内容は, 「社会文化能力」「社会言語能力」「言語能力」の各要素からなる「リテラシー (literacy, 何かを理解し, その理解を行動のために使いうるもの)」という考え方を示している。

このような, 言語を, 誰に何をどのように表現するかという問題は, 言語運用の問題であり, 語学能力と同様, 言語運用能力も学習と実践を通じて習得されるのである。(ト2005)

海外語学研修によるコミュニケーション能力伸長教育効果がいうまでもない。語学教育は学生のコミュニケーション能力重視の育成, 語学の語彙や文法内の知識教育以外に, 特定の社会文化環境や場合における適切な言語運用能力の指導が特に大切である。

以上, 再分析で見られた日本人学生の初対面会話姿勢に現れる違いは, 「海外語学研修参加」と「未参加」グループで分けて整理したが, 勿論, 2回目の被験者にも以前どこかの海外研修を経験したことがある人がいるかもしれない。しかし, 大人数の回答者の中で回答データを少々上げたりしても, 一応, 日本で行った2回目アンケート調査の回答者なので, 取り立てて調査することはしないことにしている。そこで, 後の面接調査で詳しく話を聞き取り, 分析して明白にしたことがあったので, 次節でまとめて記述する。

3. 面接調査データ分析

面接調査の問題に関して, 前稿「その1」では8つの質問項目は全部挙げてあったが, 本稿では会話スタイルに関する考えと会話アプローチのあり方関連の項目として, 次のような設問に対する自由回答の結果をまとめることにする。

問3. 面白くない会話になってきたらどうしますか。

問5. 会話が途中で途切れそうになった時あなたはどうしますか。

問7. 初対面の相手でも自分から話しかけますか。

この他に, 問1と問2の「会話中相手との身体的位置関係」に関しても後に触れることにする。

3-1. 面接調査回答のまとめ

先ず, 以上3問の回答データを見ることにするが, それぞれ以下のような回答があった。

尚, 回答文を代表的例示の形でまとめ, 整理の便宜上, 一応, 問3はⅢ-①②③……, 問5はⅤ-①②③……, 問7はⅦ-①②③……のように示す。

問3.「面白くない会話になってきたらどうしますか」の回答例

Ⅲ-①帰る ②視線が泳ぐ ③話題と関係ないことをする ④聞き役になる ⑤取りあえずことばを発するが他のことを考える ⑥別の話題を出す ⑦話しに合わせて相槌を打ちながら話しが終わるのを待つ ⑧話題転換を試し相手の反応で終了かを定める ⑨相手のことを尋ねるようにする ⑩最近の共通話題を探す

問5.「会話が途中で途切れそうになった時あなたはどうしますか」の回答例

V-①何もしない ②会話をやめる ③途切れても良い、沈黙 ④笑ってごまかす ⑤話しに合わせて相槌を打ち話しが終わるのを待つ ⑥料理を注文するかなど何か話す ⑦相手が無言になるのを嫌うようなら、なるべく途切れないようにさりげなく努力する ⑧話題を探し相手の様子をうかがう等して、取りあえず続ける ⑨同じ関心の話題を探す ⑩他の人も会話に誘う

問7.「自分から初対面の相手でも話しかけますか」の回答例

VII-①相手が話しかけてくるのを待つ ②話しかけない ③相手の雰囲気による ④話さなければいけない時は話すが、話さなくても良い時は話さない ⑤相手が独りなら（可哀想だと思って）話しかける ⑥何かとかける ⑦相手を見て話しかける ⑧話のネタが多いから、積極的に話しかける ⑨相手に話しかける

以上は回答例をまとめて表示したのだが、それぞれ回答例には重複が多いのもあれば、似たような回答もあるので、同じ回答にまとめたのがあった。また、1人だけ回答した例もあるし、問3と問5に同じ回答をするのもあったが、一応、問7に対する回答の例が本来少ないので9個に、問3と問5に関し、無理なく10個ずつ整理しておくことにする。以上を分類して見るのは面白い。

3-2. 面接調査回答の分類と分析

以上回答を分析すると、次のようなことが分かってくる。

- a) Ⅲ①「帰る」、V①「何もしない」、V③「途切れても良い、沈黙」、VII①「相手が話しかけてくるのを待つ」類の表現は会話において積極性がなく、回避的言語行動として受け取れ、会話の消極的参与と見よう。
- b) Ⅲ④「聞き役になる」、Ⅲ⑤「取りあえずことばを発するが他のことを考える」、V⑦「相手が無言になるのを嫌うようなら、なるべく途切れないようにさりげなく努力する」、VII③「相手の雰囲気による」のような表現は相手や場面の状況によって行わ

れるもので、どちらかという、相手次第で会話参加が決まる場依存的言語行動であり、やはり消極的な参加行動と考えよう。

- c) Ⅲ⑧「話題転換を試し相手の反応で終了かを定める」、Ⅴ⑥「料理を注文するなど何か話す」、Ⅴ⑧「話題を探し相手の様子をうかがう等して、取りあえず続ける」、Ⅶ⑥「何かとかける」、Ⅶ⑦「相手を見て話しかける」類は、「取りあえず」、「何とか」、「試し」、「相手を見て」等の前提的要素はあるが、能動性ある対話参加姿勢で、場を持つ努力や配慮のあるアプローチと見なし、比較的積極性のある会話持続性言語行動と考える。
- d) Ⅲ⑨「相手のことを尋ねるようにする」、Ⅲ⑩「最近の共通話題を探す」、Ⅴ⑨「同じ関心のある話題を探す」、Ⅴ⑩「他の人も会話に誘う」、Ⅶ⑧「話のネタが多いから、積極的に話しかける」、Ⅶ⑨「相手に話しかける」類は紛れもなく会話リードができる積極的な参加姿勢で、会話主導性言語行動と名付ける。

以上の分類をまとめると、次の4つの初対面会話参加言語行動スタイルに整理できよう。

- a. 場面回避性言語行動
- b. 場面依存性言語行動
- c. 会話持続性言語行動
- d. 会話主導性言語行動

もし、以上の4つを大きく分けると、b.類は積極的な参加姿勢と考えにくく、消極的な区分に入れるとすると、a.とb.は消極的な区分に分け、c.とd.は積極的な区分に分けられるようになる。そうすると、表4のような分類はできる。

表4 面接調査回答の会話スタイル分類

消極的言語行動		積極的言語行動	
a. 場面回避性言語行動	b. 場面依存性言語行動	c. 会話持続性言語行動	d. 会話主導性言語行動

では、それぞれの回答者の考え方はどの会話行動方式の分類に入るのでしょうか。先ずもっとも「消極的」と思われる回答から見てみると、a.類に入る上記Ⅲの「視線が泳ぐ」「帰る」、Ⅴの「何もしない」「会話をやめる」「笑ってごまかす」「沈黙」、Ⅶの「相手が話しかけてくるのを待つ」の回答者は、全員「日本人海外語学研修未経験学生」であり、他グループ「日本人海外語学研修参加経験学生」と「中国人学生」の回答者には1人もいなかった。これらを再度整理し、表5に示してみる。

尚、表示便宜上、「日本人海外語学研修未経験学生」を「未」と、「日本人海外語学研修参加経験学生」を「参」と略して表示し、「中国人学生」を「中」と略して表すことに、暫ししておく。

表5 日・中学生初対面会話スタイル4分類及び回答例と回答者類型

	消極的言語行動		積極的言語行動	
	a 場面回避性言語行動	b 場面依存性言語行動	c 会話持続性言語行動	d 会話主導性言語行動
Ⅲ-問3. 面白くない会話になってきたら	①帰る [未] ②視線が泳ぐ [未]	③話題と関係ないことをする [未・参] ④聞き役になる [未・参] ⑤取りあえずことばを発するが他のことを考える [未]	⑥別の話題を出す [未・参・中] ⑦話しに合わせて相槌を打ちながら話しが終わるのを待つ [参] ⑧話題転換を試し相手の反応で終了かを決める [中]	⑨相手のことを尋ねるようにする [中] ⑩最近の共通話題を探す [中]
V-問5. 会話が途切れそうになったら	①何もしない [未] ②会話をやめる [未] ③沈黙 [未]	④笑ってごまかす [未] ⑤話に合わせて相槌を打ち話が終わるのを待つ [未]	⑥料理を注文するなど何か話す [中] ⑦相手が無言になるのを嫌うようなら、なるべく途切れないうようにさりげなく努力する [参] ⑧話題を探し相手の様子をうかがう等して、取りあえず続ける [参・中]	⑨同じ関心の話題を探す [中] ⑩他の人も会話に誘う [中]
Ⅶ-問7. 初対面の相手でも話しかけるか	①相手が話しかけてくるのを待つ [未] ②話しかけない [未]	③相手の雰囲気による [未・参] ④話さなければいけない時は話す、話さなくても良い時は話さない [参]	⑤相手が独りなら(可哀想だと思って)話しかける [未・参] ⑥何かとかける [参・中] ⑦相手を見て話しかける [参・中]	⑧話のネタが多いから、積極的に話しかける [中] ⑨相手に話しかける [中]

上記a.類に続き、b.類の回答者を見ると、日本人の語学研修参加経験者と未経験者学生のみで、中国人学生がいないことに気づく。

そして、c.類は3グループの回答者が混在し、ⅢとV⑥の「別の話題を持ってきて何とか会話を続ける」やⅦ⑤の「相手が独りなら話しかける」と答えた海外語学研修非参加学生も少数いる外に、Ⅶ⑥「何かとかける」やⅢ⑧の「話題転換を試し相手の反応で終了かを決める」等を答えたのは日本人語学研修参加学生と中国人学生半々であった。

最後に、d.類回答例の回答者は一色、中国人学生であった。

この類別で分かったのは、a.とb.の会話参与消極的なのは、日本人学生で特に語学研修参加未経験学生が多く、また、相手に合わず等行動を選択するb.の方では、日本人海外語学研修参加経験学生も多い。場を持つ会話努力等をするc.の比較的積極的なのは、3グループ学生共にいるが、日本人語学研修参加学生は多く、非参加学生は少ない。d.の会話参与が積極的なのは中国人学生である。特に学生交流の会話が躓いた時等の「共通関心的话题を探す」や「他人を巻き込んで会話する」等、如何にも中国人らしく、前述日・中間の「対人親密度の価値観相違」論点が立証できる調査結果になっているといえる。

4. 結 び

エドワード・ホール (1976, *Beyond Culture*) の高文脈文化 High Context (HC) と低文脈文化 Low Context (LC) 説では、中国と日本が同様高テキスト文化と指摘されたが、違う文脈で理解しないと分からない高文脈文化の異文化同士だというべきであろう。西洋人から見てそれぞれ分かりにくい文化文脈はあるが、語用論的視点では、中国人にとって、中国語に対して日本語文化は文脈が高く、経緯度も測り難いと感じられる場合さえあろう。だから、日・中話者双方は言語コミュニケーション行動の中で、語学堪能なだけでは、異文化の差を感じ、場合には理解ができなく、場面把握に苦しむことがあり、会話を心地悪く感じたり、感じさせたりするような障害も生じることがあろう。

面接調査問1の「会話中相手との身体的位置関係はどの位が望ましいですか」と問2「あなたが思っている望ましい位置に対して相手が近づいたり遠ざかったりすることにどう思いますか」という質問に、大体日本人学生は机を隔てるとかような、相手を照準にして図る「他人配慮的発想」の答えが多いのに対して、中国人学生は聞き取れることを意識するような「親密好意的発想」を持っていると観察されている。

筆者にはこのような、中国人学生の場合は、相手と知り合いか否かという、いわば、心理的距離より話しやすいかどうかという物理的距離を優先する思考があり、別の機会でもた論じることにしておきたいが、日・中学生が会話をする際にそれぞれ意図的に自分自身の言動をコントロールしている重点の違いがあり、それは初対面会話の心地悪さにもつながるのだと結論付けておく。

最後に、研究データの集計を手伝ってくれたゼミ卒業生の星見友香氏と中村貴裕氏に感謝する。

注

- 1 ト 1990 (p6, p9) 話者の成長した環境の影響から身についた文化的素質と個人的素質や習慣による「恒常的性質」, また, 一時的健康状態や気分等による「臨時的性質」を指す。
- 2 ト他 2012 「異文化コミュニケーションにおける会話スタイル相違に関して-日・中の学生初対面会話スタイル比較考察-(その1)」 淑徳大学研究紀要 Vol.46

参考文献 (五十音図順)

- 久米照元・徳井厚子・徐一平 2000 「コミュニケーション様式の日米中比較研究-小集団討論の質的分析を通して-」『平成11年度COE形成基礎研究費研究成果報告(4)』神田外語大学
- 重光由加 2005 「何を心地よいと感じるか-会話スタイルと異文化間コミュニケーション-」井出祥子・平賀正子編 『講座社会言語科学1 異文化間コミュニケーション』ひつじ書房
- 鈴木孝夫 1973 『ことばと文化』岩波新書
- ネウストブニー,J.V.1982 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書
- ネウストブニー,J.V.1995 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- ト雁 1990 「あいさつ行動様式に関する基礎的探究-日・中語あいさつ表現の比較を中心に-」筑波大学日本文化研究学際カリキュラム紀要『日本文化研究』Vol.2 (pp1-18)
- ト雁 2004 「呼称におけるポライトネス心理考察-親族呼称の虚構的用法に関する日・中・英語比較-『淑徳大学社会学部研究紀要』Vol.38 (pp313-328)
- ト雁 2005 「コミュニケーションと文化」『コミュニケーションの心理学』吉田章宏・田中みどり編集 川島書店 (第8章 pp179-200)
- ト雁 2012 「異文化コミュニケーションにおける会話スタイル相違に関して-日・中の学生初対面会話スタイル比較考察-(その1)」『淑徳大学研究紀要』Vol.46 (pp115-133)

A Study of the Conversation Style Differences in Intercultural Communication : A Comparison of Japanese and Chinese Students' First Conversation Style (Part 2)

BU, Yan

This is a continuation of the last paper (part 1). In this paper, after reconsidering the survey data, not only from the viewpoint of a study of Japanese and Chinese students as two groups, but also considering their respective sub-grouping of with or without students' overseas foreign language training experience, each of the groups were addressed in the analysis. Each case exhibits a statistically significant trend, hence leading to an advanced investigation regarding differences in communication styles and conversational styles between Japanese and Chinese speakers.

Through the research and analysis, this paper discusses a notion which both Japanese and Chinese students used during conversations relating to a deliberate controlling of each person's speech and behavioral approach in accord to their different respective viewpoints. In addition, explanations are given with considerations of the differences in expression in respect to intimacy caused by their linguistic actions relative to differences across cultures.

In this study, in regards to the first conversational style, the following theory for conversational classifications is suggested for the first time. There are two behavior types belonging to the passive linguistic behavior category, namely, "scene avoidant linguistic behavior" and "scene dependency linguistic behavior". In contrast, there are two types that belong to the aggressive linguistic behavior category, which are described as the "conversation persistence linguistic behavior" and "conversation dominator linguistic behavior". This study presents a challenge for the language teaching methods in association with the intercultural communication styles.